

「底が突き抜けた」時代の歩き方 331

戦時下の精神状態 ― 集団自決はどのようにして起こったのか

チビチリガマの集団自決は日本の敗戦の4ヶ月半前の1945年4月1日から3日までの間に起こったが、その様相については、『チビチリガマの集団自決』の著者である下嶋哲朗が住民から聞き取った「話」をつなげていくことによって浮かび上がってくるだろう。それらの「話」はかつて沖縄のある場所で起こった悲惨な出来事であるけれども、アフガンやチェチェンを含む他の戦場で今も現に生起している出来事でもあり、また我々（日本人）の未来を重たく覆っている惨劇として我々に語りかけており、非常に切実で重要な出来事として把握することが迫られているにちがいない。もし自分がその時、その場所にいたなら、一体何ができただろうという問いをたえず念頭に置きながら目を通してほしい。

● 1945年4月1日

「――うちのほかに、たくさん避難していたよ。そこへ、3人の友軍^{ゆうぐん}の兵隊さんがやってきた。

「なぜ、もっと遠くへ避難しないのか。敵はここに上陸してくるんだ。みな出ろ！」

こうして、友軍に一人残らず追い出されてしまったよ。あれは3月29日のことだ。

追い出されて、うちらがチビチリガマの上に出たら、夜だった。もう照明弾が、バンバン上がって、パアッと昼間のようにうき出たと思ったら、その次はドンドン艦砲^{かんぽう}がくるんだから！

北へ向かって逃げたんだけど、爆弾が雨のように降ってきて、どうしても行けないから、またもどってきて、うちらはシムクガマに入ったよ。おやじ（夫）が寝たきりで、半身不随で一人では何もできなかったですから……。

ガマから追い出された時は……、ああ、もうこんな話、やりたくありませんよ……。ガマの外に一步出たら、艦砲がボンボンして。それでも長女と私は、おやじかついで、長男も次女も、小さな弟、生まれたばかりの妹をおっぱ（おんぶ）してね、8人家族が艦砲にねらわれて、逃げたよ。

こんな話、もうやりたくありませんよ……。」

「――友軍は、手りゅう弾持っているだろうから、「ガマから出ていけ！」というあれたちにちょっとでも抵抗すれば、すぐやられただろうからね（日本軍が、沖縄各地で起こした住民虐殺のことを指している）。あれたちが、アメリカーの上陸前に出ていったあと、うち

らはまた戻って入っているんだから……。]

〔――ガマの外へ出て、七輪^{しちりん}の上になべを乗せ火をおこそうと、ひょっと上を見ると、ケハン（脚絆）をつけない兵隊（日本軍は脚絆を巻いていた）がいたさあ！

「アメリカーだ！」と、私が叫んで中へとびこんだものだから、もう大さわぎになったよ。すべってころぶ者、ふとんかぶってふるえている者、泣きわめく赤ちゃんをだきしめる者……。]

〔――「帝国日本の男児^{だんじ}たるものが、そのうろたえようは何かっ！ アメリカの目は、ヒージャーミーよっ！（山羊の目、ということで夜は目がきかないということ。アメリカ軍は夕方になると、ピタリと攻撃をやめたことから、夜は目が見えないのだろうとうわさした。）

もうここへくるまでには、太平洋のあちこちで無敵の皇軍（天皇の軍隊、日本軍）にたたかれて、やつらはつかれ切っているさあ。足は棒のようにやせてよ、フラー（ばか）になっているさあっ！ 少しも恐れることはないよっ！ 竹槍持って闘いなさいっ！」……]

〔――うちは、竹槍持っていきなさいと、若い人にうちの竹槍をあげたよ。若い人たちはみな出なさいと、お母さんたちがはげまして、包丁まで持たしていますよ。女たちだってハチマキしてよ、うしろからついて突撃していきましてよ……。うちらは、竹槍で闘ってよ、アメリカーに勝てると思っていたからねえ……。]

〔――うちらは、アメリカ兵が落下傘からおりてきていると思ってですよ、それなら人数も少ないはずだから、みんなでやっつけられるくらい的人数だから、と、思いこんでですね、「やっつけろっ！ やっつけろっ！」と、竹槍持って出たんですよ。そうしたらとんでもない。ガマの上には戦車も、アメリカーもびっしり。もう上陸していたんですよ。

10メートルぐらい上にいるアメリカーに向かって、竹槍をヤーヤーと突き出したんです。そうしたら相手は機関銃を撃つし、手りゅう弾を投げたので、前になっている人たちは、その場にたおれて、うちら女はどうすることもできないで、ガマの中へ逃げ帰りました。

13歳以上は、竹槍持ってみんな出ましたよ……。]

〔――それからアメリカーが、壕^{ガマ}の中に入ってきたんですよ。「殺しはしないから、ここを出なさい。」と、通訳みたいな人がいっているんですが、うちらにはうそとしか思えないですよ。

壕の中まで4、5名のアメリカ達^{ガマ}が、鉄砲持って、懐中電灯持って、「殺しはしないから、出なさい。」と……。あれたちのいうことを聞いておけば、こんなことなかったのに……。

殺される、とこれだけしか思ってなかったからね。こんなことしか教えられてないんだから……。アメリカーからお菓子なんかもらっても、〈毒が入っている〉としか考えなかったんだから……。]

著者はいう。《逆光を背に受けて、ガマに入ったアメリカ兵が見たものは何だったのだろう。おびえ切ったあわれな避難民。追いつめられた人間のむき出しの姿。それこそが、くすべての民は、この世に人の姿となって現われた神、天皇の子ども・赤子》であると教えこまれ、信じ高ぶり歩いた日本人のいつわらぬ姿であった。〈男子は天皇の^{たて}楯となって死ぬことであり、女子は死んでいく兵士の妻となり靖国の母となるという臣民の道〉を歩んだ日本人の末路だった。

チビチリガマの出来事は、決して沖縄のひとつのできごとではない。アメリカ軍が立てた作戦通りに事が運び、実際に本土に上陸をし、本土内で地上戦が戦われたとしたら、全国のいたるところで起こったはずの出来事なのである。》

《その時まともな者は一人としていなかっただろう。だが集団自決は混乱がもたらせたものではない。天皇の子どもがとるべき当然のこととして自決をしたのである。

「鬼に殺される！」

チビチリガマの避難民たちはアメリカ兵の呼びかけを全く信じようとはしなかった。一人として出ようとはしなかった。それどころかくびれた細い穴をわれ先に争ってくぐり、奥へ奥へと追いつめられていった。こうして31家族全員が奥の部屋へ、逃げ込んだ。

アメリカ兵は肩をすくめ、あきれたふりをして出てゆく……。避難民たちは自らの手で運命の扉を閉じたのだとも知らず、ほっと胸をなでおろした。

ガマの外には多数のビラが風に舞っていた。ビラには、「食べ物も着る物もたくさんある。安心して出なさい」と書かれていた。》

●1945年4月2日

「——南洋から帰ってきた人たちが、「サイパンでも、こういうふうにしたから、そうしよう。」といって、ふとんやら、着物やら燃えるものを積み上げて、火をつけようとした。サイパンではそうやって、火と煙で自決したからと……。

「そんなに死にたければ、自分たちで勝手に死ねばいいっ！」

「何いうかあっ！ 日本人なら天皇陛下バンザイして、死ぬべきではないかっ！」

ああ！ あの時からもう、みんなケンカですよ。全員一致団結してお国のために、だなんて！ アメリカーのほんとうの姿を知ったからね、そんなきれいごとではないですよ。もうみにくい争いですよ。せっかくここまで命びろいしてきて、何でそんなことするかねえ？ といって。

もう大ゲンカですよ。その人たち、サイパンの玉砕から、せっかく命助かって帰ってきているのに、こっちで命なくして……。

アメリカーに手りゅう弾投げられて、傷を負ったもんだから、それからは騒動して、生きる望みがない……と、気が狂って……。]

著者は「サイパン帰り」と聞いて、《サイパン島での自決は1944年7月7日であ

る。二人はその後、どのような方法で沖縄へ帰りついたのであろうか。サイパンの日本人の多くは、アメリカ軍に収容された。収容経験者数名に、その方法を聞いてみたが、戦争のまっただ中、沖縄へ帰りつける方法があったとは思えないと、首をかしげる。だがチビチリの体験者たちは一様に、二人がサイパン帰りであったと証言する》という但し書きをつけ、この火をつけようとする「サイパン帰り」の年長者に反発をして、すぐ火をたたき消したのが幼児を抱えた母親たちであり、《サイパン島での自決からからくも生き残った者たちとは明らかに人間、生命に対する考え方が異なっていたはずである。》と推測する。《母親たちによっていったん火は消されはしたものの、昼とも夜とも判別のつかない暗闇の底の世界、チビチリガマの中では、死のう組と生きよう組との争いがつづ》き、《おたがいの肩がぴったりつくほどに密集したガマの中だというのに、避難民は二つの組に割れ、口ぎたなくののしりあうのである。それは単なる口論などではない。まさに生命をかけての闘いなのだ。見栄も外聞もあろうはずはなかった。》

● 1945年4月3日

《3月23日の上陸作戦、4月1日の上陸。ろくに食べられず、飲めず、眠れないという日々が11日目に入った。密室に近いガマの中は人いきれで酸欠状態にあった。心身は疲労の極みに達し、思考は錯乱している。》

「——とうとうアメリカーは、ガマの中まで入ってきて、

「カマワン！ デテコイ、コロサナイ！」という。

だけどサイパン帰りの一人のおじいがあったさ。

「誰が信じるものか！ 殺さんなんていうのは、うそだ！」

アメリカーは、「ハヤクデナサイ！」と、手で合図する。出ようか、やめようか……。どうしたらいいのか。「立ち上がってみろ、とたんに射殺されるぞ！」と、またおじいがとめる。

そうしているうちにアメリカーは、いってしまったよ。そのすきにまた、さっきのおじいが、せまい口^{くち}にふとんやら毛布やらを山積み^{ぐわー}に積み上げて、ランプ^{ぐわー}の石油かけて、火をつけたよ。煙と火で死のうって……。支那事変（日中戦争、1937年）などで戦争をしてきたおじいだから、日本軍が中国人にやったひどいことを、今度はこっちがやられる番だ、と思いこんでいたから……。

「どうして、そんなことするかあ！」と、ガマの中はまた争いになったよ。

中に看護婦さんがひとりいて、自分の家族に毒を注射するさあ！

アエー。うちは子ども6人と、おばあさんと8人家族。どうするかねえ、助かりたいと外に出ればアメリカーに殺される……。

こんな煙と火で苦しむなら、毒を注射してもらって、楽に死ぬかねえ……。】

著者は、「どっちみち、死ぬしかないじゃないか。だから、きのう死んでおけばよか

ったんだ。後でも先でもこうなるんだっ！」と昨日火をつけた男がどなり、《ガマの中で最後の争いが始まった。自決への引き金となるべく事態は着々と進行していく》、その経過を三段階に分けて記録している。

第一段階 ^{はる} 春の死

〔――殺してくれと……、春はお母さんに願うさあ、早くやってくれと……。〕

「お母さん。人の手ではなく、お母さんの手で私をやってください。アメリカに犯されて死ぬくらいなら、私を生み、育ててくれたお母さんの手で、きれいなままで殺してください……。お母さん、私をこれまで大切に育てていただき、ありがとうございました。先に旅立つ不孝をおゆるしください。何も子どもらしい孝行もせず、申しわけありません……。」

春（18歳）の遺言はもう……。長くて自分の思うだけの全部を、お母さんにはき出して……。〕

〔――お母が、^{かあ}春の首を切ったり……。〕

〔――右側を包丁で切ろうとしているさ。そしたら、左側を切ると死ぬ。右側じゃあ死ねない、という人がいたよ。その人は、「失敗しそうなら、手をかけるな！」と、お母にいったが、お母は、「できる！」といって、包丁で春の首を切ったさ。〕

春が何度もお母に、やってくれ、やってくれ、と遺言してからだったよ……。〕

〔――ザーッと、血しぶきの雨だったよ。春は、もう、あたり一面に血をふき飛ばして……。〕

《母カマは、娘の春を殺してからはもう狂人であった。一族全員を自分の手で始末し、自分一人がすべての罪を背負って地獄へおちればいい……。次に目の見えない長男（平吉・27歳）を殺し、その次は口のきけない伯父（平幸・43歳）を……。〕

母カマは平吉に馬乗りになると包丁をふりかざし、所かまわず突き立てていた！ ちょうどそこへアメリカ兵が入ってきた。おどろいたアメリカ兵は母カマを突きとばすと、もう意識を失っている平吉の足をつかみ、外へ引きずり出したのだった。

つづいて伯父の平幸も救出された。その後母カマは、救出しようとしたのべるアメリカ兵の手をこばみ、ガマの奥深くへ入り込んでいった。そこでは自決のすなわち第二段階が起ころうとしていた。》

第二段階 看護婦、ユキ

《春の自決を見て元従軍看護婦のユキ（25歳）は決心がついた。救急用の薬品箱から注射器と毒薬を取り出した。それから家族をひとまとめにまとめた。〕

「うちらも死のう。軍人はほんとうに残虐な殺し方をするよ。うちは中国でさんざん見ているから、よく知っている……。』》

「――看護婦も、親戚以外の者には注射をやらなかった。この人は誰か？　といって、手をのばしてね、確かめていたよ。暗いからね。」

注射してから、水飲みましたよ。水飲んだら死ぬといって。知花ヨネの家の……ヨネの子は赤ちゃんで、まだ7か月だったはず……男の子。名前も、もう分からないさ……。

お母さんが、もう死んだ子どもだきしめたまま、水がぶ飲みしてねえ……。

注射をされた人たちは、早く死ねていいねえと、みんなから、うらやましがられたよ。「注射を、注射をしてください。」といったけど、「量が少ないから身内だけ。」と、こたわられた。]

第三（最終）段階　着火

「みんながみんな、死ぬ気じゃないからもう、めちゃくちゃ。泣きわめくなど、せまいガマの中はたいへんでしたよ……」。

《昨日いったん消された火が、今ふたたび着火された。午前9時頃だった。ウト、トシ、シズ、カマドの4人の母親は必死になってとめた。だが今度は押し切られてしまう。

「火をつけるよっ！　出たい人は出なさい！」

そう、サイパン帰りが叫んでいる。生きよう組がくびれた口を通り、前の部屋へ移った。けれども外へ出るわけにはいかない。鬼のようなアメリカ兵が待ちかまえているのだ。

前の部屋に移った者の中から、生存者が出た。》

「――前の部屋に移ると、アメリカーがまた入ってきた。「着る物も、食べ物もある。安心して出てきなさい。」と大きく書いた本のようなものを電灯で照らして、みんなに見せたよ。食べ物には毒が入っているから絶対に食べるな、といわれていたから、だあれももらわなかったよ。

だが、うちはもらった。どうせ死ぬなら、アメリカーのものを食べてから、死のうと思ったよ。長いあいだ、何も食べていなかったんだ。自分の子どもに食べさせたよ。そうしたら死なないわけさあ！

だいじょうぶだよ、アメリカーは殺さないよ！　と奥の人たちにもいったのに……。出て来なかったよ……。]

「――「出たい人は出なさい」といわれて安心して、どうなってもいいから……。煙で苦しんで死ぬよりは、アメリカーに撃たれて、楽に死にたいとチビチリガマの外へ出たさ。前の部屋にいたからよ、奥の部屋の人たちがふとん重ねて、ランプの石油かけて、半分燃えるのを確かめてから出たよ。火をつけて、まっ暗だった部屋が明るくなって、人の顔も見える状態になったよ。人が一人やっと通れるような向こう側で、火をつけたからね、中に入っている人たちはもう、出たくたって出られないよ。ふとんやまきや、いっぱい積み重ねられていたから……。

火がつくと炎で、奥の部屋にいるおじいやおばあの顔が、真っ赤になって、うつって
いた……。もうこれでおしまいと、オニのように真っ赤な顔してバンザイしている。天
皇陛下バンザイと……。真っ赤な人たちが、自分たちのふとんや、着物を燃える火の中
に投げこんでいるんだよ。わやわやする炎の向こうに、バンザイ、バンザイと手を上げ
ている人たちが……。もうこれだけが忘れられない……。

うちは都屋^{とや}の収容所に入れられて、三日ぐらいしてから、どうなっているかな、助か
った人がいたら助けようと、見にきたよ。まだまだ、煙が出ていたよ。三日もたったと
いうのに、まだもうもうと……。あんなたくさんのふとんだったから。

あの時うちは、まだ11の子どもだったからねえ……。]

《真っ赤にもえさかる炎の向こう側には、娘春を死なせた母、カマの姿も見られたとい
う。天皇陛下バンザイと叫びながら……。》

〔——もうアメリカに殺されるよりは、といって火を着けたんですよ。でもぼくたち
は、煙の中で苦しんでいるのを見ていたら、とてもこわくなってきたんですよ。〕

ぼくのお母さんは、あんな苦しみ方をするのなら、外に出て弾に撃たれて死んだほう
がいいと、考えたんですね。

奥の部屋の人たちの中には、火が着けられたら、「しまった！」と思った人もいたで
しょう。でも、もう出られない……。]

《ガマの外へ出た人たちの中で、助かろうと考えた人はおどろくほど少ない。ほとんど
いなかったといってもいい。煙で長時間苦しむよりは、アメリカ兵の手にかかりあっさ
り死にたいと出ていったのだった。》

〔——あんまり苦しくてもがいた手が、知らぬまに誰かの服を、しっかりつかまえてい
たよ。その人が立って歩き出して、うちもついていった。煙で何も見えやしないさ。義一^{よしかず}
も腰の着物をつかまえて、ついてくる。うちが何かにつまずいたひょうしに、義一は手
をはなしてしまったよ……。そのすぐ後、明かりが見えた。〕

義子はもうグッタリしていてね、だめかと思ったが、アメリカがサトウキビの汁を
しばって、口の中にたらしたら、ゴクリと飲んで、息を吹きかえたよ。アメリカに
義子を抱いてもらって、懐中電灯をかりると、うちは義一をさがしにもどったけど、煙
がひどくて、懐中電灯一つじゃあ、見えないわけさあ。それでもう一つかりて、二つで
てらして入ろうとしたら、もう煙がひどくってよう……。うちが入って死んだら、義子
をどうするかなと思うとよお、もう入っていけなかったんだよお……。]

《今チビチリガマは何ごともなかったかのように、うっそうとした木々の下に埋もれて
いる。〕

証言者の一人、知花カマドは静かなチビチリガマの上に立っている。

「ウソを教えなければ、ほんとうのことを教えてくれたなら、誰も死なずにすんだ
のに……。」

「――この子（栄幸）はもうだめだから、ガマにおいていきなさいと、蒲名城のおじいさんがいっていたよ。

上陸空襲の始まった二日目に生まれているからね、まだ10日にもなっていなかったさ。栄幸は煙にあおられて、アップアップしていたよ。ガマを出て土手の半分までくると、口からアワをふき出しているもんだから……。

うちはガマの奥にいたからねえ。アエーッ！ 子ども6人とおばあさんの8人家族、どうするかねえ、こんな煙と火で苦しむなら、毒を注射してもらって、楽に死ぬかねえ、と考えていたら、どこかの姉さんに、「子どもたちがかわいそうだよ、早く逃げてください。」といわれて、出る決心をしたよ。

うちは栄幸をおっぱ（おんぶ）し、おばあさんは4歳のヒロコをおっぱし、しげるが先頭に立ち、一列になって手をつなぎ、奥へ奥へと入っていった。

うちらが最初にたどりついた部屋では、おじいさんが死んでいた。そこから先は、いく筋にも道が別れていて、どちらへ行ったらいいのか、分からないわけよお。このおじいさんも、出口を見失って死んでいるわけさあ。

うちのおばあは、「アー、ウートートー、マガンチャー、ミーヌガーラチ、トラシンソーリー。」と、祈りつづけていたよ。ウートートーは、神様におねがいすること。マガンチャーは、孫たち。ミーヌガラチは、見ないふりをすること。トラシンソーリーは、取り上げないでください、ということさ。「ああ、神様。わたしのかわいい孫たちを、この無惨な戦争から、見逃してやってください。」と、祈っているんだよ。

しげるは、「お母さん、ぼく一人で出口をさがしてくる。このままだと、みんなが死んでしまう。」という、ずっと、つないでいた手を放した。あっ、しげるっ！ と思ったが、もうまっ暗でさがせないよ。

いくら待ってもしげるはもどってこない。煙がまいてくる……。

〈とうとう、ここで死ぬんだ……。〉と、かくごをした時、「母ちゃん、おばあ！ 出口だよお！」と叫ぶしげるの声がして、電灯の光が煙の中をちらちらして、しげるがきた。みんなを連れてしげるのあとからついていった。まもなく、太陽がパーッと照るさあ！ だけどガマから出ようとすると、アメリカーがいっぱいいるさあ。うちのサトウキビ畑には、戦車がびっしりしていて、ガラガラ走っているよ。足がすくんでしまってよお、もう前へはいけないわけさあ。おそろしくて、ものもいえない気持ちさあ。

うちの背中でアップアップしている栄幸を、アメリカーがひったてて、水を飲まそうとした……。『殺される！』と、思ってよ、取り返したよ。水に毒が入っていると思ってよ……。うちは栄幸の口をむりにこじあけてよ、おっぱいをふくませた。アクン、アクン飲んでさあ……。

栄幸は今、神奈川県の川崎で、二人の子どもの親になっているさあ。

アメリカーがチョコレートを出しても、しげるは、「毒が入っている。食べるなっ！」

と、捨ててしまうわけさあ。

そんなしていると、アメリカーは戦車（舟艇のこと）ゆびさして、「ノリナサイ。」というさあ！ 「アイエー、うちら、戦車に乗せられて、海に捨てられるかねえ！」と、思った。みんな戦車に乗って、ワアワア大声で泣いてよお、連れていかれたさあ。ところが、海には捨てられないでね、都屋^{とや}の収容所へいったわけさあ。]

家からチビチリガマが遠く、途中のシムクガマに避難したために助かった例もあれば、逆に別のガマへ行く予定であったのに、子供のねんざがもとでチビチリガマへ引き返した例もあった。《助かると信じて選んだ道が、死へ通じている。かと思えば死の道とあきらめていたのに、行く手には光が待ちうけていたりする。闘うことが仕事の兵隊ならいざ知らず、住民が闘いにまきこまれた時、どちらの道を選ぶかの自主的な選択の道はまったくない。助かるのも死ぬのもそれは偶然でしかない。運は天にまかせるほかないことをこれからの証言者たちが教えてくれる。》と著者は書く。だが少なくともそのいいかたはあまりにも一般的にすぎてチビチリガマの集団自決者たちにはそぐわないと思われる。なぜなら、彼らの前には「生と死の分岐点」があったわけではなく、もともと死しかなかったからだ。死の方向に集団自決かアメリカーによる虐殺かの二者択一しかないと思ひ込まれていた。

戦前の日本は紛れもなく「国のために死ぬる国」にはかならなかった。国（天皇）は戦闘員の全兵士のみならず、全国民にまで「国（天皇）のために死ぬる国民」であることを強要し、国民はそれに従った。問題は、国（天皇）が敗戦によって滅びつつあるときでも、いやそのときこそより一層「国（天皇）のために死ぬる国民」であることを強要しつづけたところにあった。もう生きよ、とはけっして発しなかった。となれば、どっちみち死ぬのであれば、皆で死のうとなるのは一直線であった。集団自決に向かってマインドコントロールしつづけた国（天皇）は最後の最後まで、自らの手でそれを解除せずに放置したままであったのだ。チビチリガマの集団自決は如実にそのことを物語っている。

著者は波平部落の人口の防空壕で起こった別の集団自決も取り上げている。8 畳ほどの壕の中に25人が残り、一つの手りゅう弾でそのうち生き残ったのは8人である。

《私は5人の家族と共に、いよいよ覚悟せねばならなくなりました。

25人のものはそれぞれ身辺を整え、グショー着（死ぬときに着ける着物）して、最後に備えました。私は年老いたしゅうとめと抱き合って、いよいよの時を待ちました。

夫の妹の一人が、「姉さん、夫である兄もいないのに（フィリピンで行方不明になっていた）、母を、家族を見てくれてありがとう、本当に……さようなら……。」と、おえつしていた言葉が今も忘れられない。

死ぬ前に一言でも話すと、そばから「死ぬ人が話すネー、何もいわんで死ぬのがいいさー。」と、どなられました。私はしゅうとめを片腕に、そして息子（やはり出征して行

方不明)の形見のオーバーを片腕に強く抱きました。するとまた、どなられました。

「死ぬ人が何でオーバーかぶるネー、裸になったほうが弾は強く当たるのに。」

やむなく私はオーバーを手放しました。

リーダーの、「ヨーッ！」と、信管を抜く合図を聞くと不気味な沈黙が広がりました。すると突然、ビーンッ！と、手りゅう弾が炸裂しました。

私はどうして息子のオーバーをかぶったか知りません。気がついた時に、私は息をしていました。強いショックで伏せたまま、起き上がれませんでした。耳をやられたらしく、ツーンと鳴っていました。土煙が壕の中に充満し、火薬のにおいが鼻をつき、もうもうたる状態でした。

しばらくして、私は意識もはっきりしてきました。

「私は死んでいない。」と、泣きさけぶ声が聞こえる。うめき声が重苦しくひびく。耳もとにコトコトと不思議な音が聞こえた。よく見るとそれは、半死した人間の破裂した心臓から流れる血の音でした。私はあの光景を思い出したくありません。》(1973年12月5日付『聖教新聞』より抜粋)

「——うちのおじいは(手りゅう弾に)当たっているから、「おれから早く死ぬ。」と、たえだえに息をする度に、おならが出るみたいに、ブッ、ブッ、と血がふき出す。血はもうふとんを重ねておいても、しみ通るくらいだったし……、それでもあくる日までもっていたから、めずらしいよ……。

もうああいう状態になったら、どうしたら生きのびれるか、ということより、どうしたら死ぬるかということ、を考えるわけさ……。

うちは足に当たって、痛くてたまらなかった。夜、アメリカーがきたけど、何もしないで行ってしまった。イリンダカリ(屋号)のおじいは、アレーッ！　といいながら亡くなった。おじいは、「私を残して、あんたたちは逃げなさい。最後に水を飲まして……。」と、いったもので、井戸へ行ってみると、井戸水は血でまっ赤にそまっていたよ。

生き残ったものたちは、毒薬を飲もうということになった……。

うちは自分が飲んでから、誕生をむかえたばかりの娘に飲まそうと思ったけど、飲まないわけさー。無理に口をおしひらいて、飲ましたんだよ。この子に大人の分量を飲ませていたら、生きてはおれなかった、と今でも子どもの顔を見ると、きもっ玉の冷える思いがする。

運がよかったんですよ、助かって……。」

《悲劇はまだつづく。》と著者は記す。

《戦後、外地から戻った三人連れの親子があった。読谷にいるはずの家族がどこに行ったか分からない。誰に聞いても何も教えてはくれない。

防空壕で自決をしたとわかった時、三人の親子は後を追うように心中をしたのだった。》

2002年9月29日記

